

たけくらべ

樋口一葉

青空文庫

廻れば大門おほもんの見返り柳いと長けれど、お齒ぐる溝どぶに燈火ともしびうつる三階の騒ぎも手に取る如く、明けくれなしの車の行来ゆききにはかり知られぬ全盛をうらなひて、大音寺前だいおんじまへと名は仏くさけれど、さりとは陽氣の町と住みたる人の申き、三嶋神社の角をまがりてよりこれぞと見ゆる大厦いゑもなく、かたぶく軒端のきばの十軒長屋二十軒長や、商ひはかつふつ利きかぬ処ところとて半さなかばしたる雨戸の外に、あやしき形なりに紙を切りなして、胡粉ごふんぬりくり彩色さいしきのある田楽みるやう、裏にはりたる串くしのさまをかし、一軒ならず二軒ならず、朝日に干して夕日にしまふ手当ことごとしく、一家内これにかかりてそれは何ぞと問ふに、知らずや霜しもつきどり月西しづの日例の神社に欲深よくふかさま様のかつき給たまふこれぞ熊手の下ごしらへといふ、正月門松とりするよりかかりて、一年うち通しのそれは誠の商買人、片手わざにも夏より手足を色どりて、新年着はるぎの支度もこれをば当てぞかし、南無なむや大鳥大明神おほとりだいめうじん、買ふ人にさへ大福をあたへ給へば製造もとの我等万倍の利益をと人ごとに言ふめれど、さりとは思ひのほかなるもの、このあたりに大長者のうわさも聞かざりき、住む人の多くは廓くわもの者ものにて良人おつとは小格子こがうしの

何とやら、下足札そろへてがらんがらんの音もいそがしや夕暮より羽織引かけて立出れば、うしろに切火打かくる女房の顔もこれが見納めか十人ぎりの側杖無理情死のしそこね、恨みはかかる身のはて危ふく、すはと言はば命がけの勤めに遊山らしく見ゆるもをかし、娘は大籬の下新造とやら、七軒の何屋が客廻しとやら、提燈さげてちよこちよこ走りの修業、卒業して何にかなる、とかくは檜舞台と見たつるもをかしからずや、垢ぬけのせし三十あまりの年増、小ぎつぱりとせし唐棧ぞろひに紺足袋はきて、雪駄ちやらちやら忙がしげに横抱きの小包はとほでもしるし、茶屋が棧橋とんと沙汰して、廻り遠や此処からあげまする、誂へ物の仕事やさんとこのあたりには言ふぞかし、一体の風俗よそと変りて、女子の後帯きちんとせし人少なく、がらを好みて巾広の巻帯、年増はまだよし、十五六の小癩なるが酸漿ふくんでこの姿はと目をふさぐ人もあるべし、所がら是非もなや、昨日河岸店に何紫の源氏名耳に残れど、けふは地廻りの吉と手馴れぬ焼鳥の夜店を出して、身代たたき骨になれば再び古巢への内儀姿、どこやら素人よりは見よげに覚えて、これに染まらぬ子供もなし、秋は九月仁和賀の頃の大路を見給へ、さりとは宜くも学びし露八が物真似、榮喜が処作、孟子の母やおどろかん上達の速やかさ、うまいと褒められて今宵も一廻りと生意気は七つ八つよりつりて、やがては肩に置手ぬ

ぐひ、鼻歌のそそり節、十五の少年がませかた恐ろし、学校の唱歌にもぎつちよんちよん
 と拍子を取りて、運動会に木やり音頭もなしかねまじき風情、さらでも教育はむづかしき
 に教師の苦心さこそと思はるる入谷ぢかくに育英舎とて、私立なれども生徒の数は千人近
 く、狭き校舎に目白押の窮屈さも教師が人望いよいよあらはれて、唯学校と一ト口にてこ
 のあたりには呑込みのつくほど成るがあり、通ふ子供の数々に或は火消鳶人足、おとつ
 さんは刎橋の番屋に居るよと習はずして知るその道のかしこさ、梯子のりのまねびにア
 レ忍びがへしを折りましたと訴へのつべこべ、三百といふ代言の子もあるべし、お前の父
 さんは馬だねへと言はれて、名のりや愁らき子心にも顔あからめるしほらしき、出入りの
 貸座敷の秘蔵息子寮住居に華族さまを気取りて、ふさ付き帽子面もちゆたかに洋服かる
 がると花々しきを、坊ちやん坊ちやんとてこの子の追従するもをかし、多くの中に龍
 華寺の信如とて、千筋となづる黒髪も今いく歳のさかりにか、やがては墨染にかへぬ
 べき袖の色、癩心は腹からか、坊は親ゆづりの勉強ものあり、性来をとなしきを友達
 いぶせく思ひて、さまさまの悪戯をしかけ、猫の死骸を縄にくくりてお役目なれば引導
 をたのみますと投げつけし事も有りしが、それは昔、今は校内一の人とて仮にも侮りての
 処業はなかりき、歳は十五、並背にていが栗の頭髪も思ひなしか俗とは変りて、藤本

信如のぶゆきと訓よみにてすませど、何処どこやら釈しゃくといひたげの素振そぶりなり。

二

八月二十日は千束せんぞく神社のまつりとて、山車だしやたい屋台に町々の見得をはりて土手をのぼりて廓なかな内までも入いりこ込まんづ勢いきほひ、若者が氣組み思ひやるべし、聞かぢりに子供とて由断ゆたのなりがたきこのあたりのなれば、そろひの裕衣ゆかたは言はでものこと、銘々に申合せて生意氣せいきのありたけ、聞かば胆きももつぶれぬべし、横よこ町組こてうと自らゆるしたる乱暴らんぼうの子供大将かしろちように頭の長ながとて歳も十六、仁和賀にわかの金棒かなぼうに親父の代理をつとめしより氣位きいゑらく成りて、帯は腰の先に、返事は鼻の先にていふ物と定め、にくらしき風俗、あれが頭の子でなくばと鳶人とびにんぞく足あしが女房にようぼうの蔭かげぐち口に聞えぬ、心一ぱいに我がままを徹とほして身に合はぬ巾はばをも広げしが、表おもて町まちに田中屋たなかやの正太郎しょうたろうとて歳は我れに三つ劣れど、家に金あり身に愛敬あいけうあれば人も憎にくくまぬ当あたきの敵あり、我れは私立の学校へ通とほひしを、先方は公立なりとて同じ唱歌も本家のやうな顔をしおる、去年こぞも一昨年おとしも先方さきには大人の末社まつしやがつきて、まつりの趣向も我れよりは花を咲かせ、喧嘩けんくわに手出しのなりがたき仕組みも有りき、今年又もや負けになら

ば、誰れだと思ふ横町の長吉だぞと平常の力だては空いばりとけなされて、弁天ぼりに水およぎの折も我が組に成る人は多かるまじ、力を言はば我が方がつよけれど、田中屋が柔和ぶりにごまかされて、一つは学問が出来おるを恐れ、我が横町組の太郎吉、三五郎など、内々は彼方がたに成たるも口惜し、まつりは明後日、いよいよ我が方が負け色と見えたらば、破れかぶれに暴れて暴れて、正太郎が面に一つ、我れも片眼片足なきものと思へば為やすし、加担人は車屋の丑に元結よりの文、手遊屋の弥助などあらば引けは取るまじ、おおそれよりはあの人の事あの人の事、藤本のならば宜き智恵も貸してくれんと、十八日の暮れちかく、物いへば眼口にうるさき蚊を払ひて竹村しげき龍華寺の庭先から信如が部屋へのそりのそりと、信さん居るか顔を出しぬ。

己れの為る事は乱暴だと人がいふ、乱暴かも知れないが口惜しい事は口惜しいや、なあ聞いとくれ信さん、去年も己れが処の末弟の奴と正太郎組の短小野郎と万燈のたたき合ひから始まつて、それといふと奴の中間がばらばらと飛出しやあがつて、どうだらう小さな者の万燈を打こわしちまつて、胴揚にしやがつて、見やがれ横町のぎまをと一人がいふと、間拔に背のたかい大人のやうな面をしてゐる団子屋の頓馬が、頭もあるものか尻尾だ尻尾だ、豚の尻尾だなんて悪口を言つたとき、己らあその時千束様へねり込んでゐ

たもんだから、あとで聞いた時に直様仕かへしに行かうと言つたら、親父さんに頭から小言を喰つてその時も泣寐入、一昨年はそらね、お前も知つてる通り筆屋の店へ表町の若衆が寄合て茶番か何かやつたらう、あの時己れが見に行つたら、横町は横町の趣向がありませうなんて、おつな事を言ひやがつて、正太ばかり客にしたのも胸にあるわな、いくら金が有るとつて質屋のくづれの高利貸が何たら様だ、あんな奴を生して置くより擲きころす方が世間のためだ、己らあ今度のまつりにはどうしても乱暴に仕掛て取かへしを付けようと思ふよ、だから信さん友達がひに、それはお前が嫌やだといふのも知れてるけれども何卒我れの肩を持つて、横町組の耻をすすぐのだから、ね、おい、本家本元の唱歌だなんて威張りおる正太郎を取ちめてくれないか、我れが私立の寐ぼけ生徒といはれればお前の事も同然だから、後生だ、どうぞ、助けると思つて大万燈を振廻しておくれ、己れは心から底から口惜しくつて、今度負けたら長吉の立端は無いと無茶にくやしがつて大幅の肩をゆすりぬ。だつて僕は弱いもの。弱くても宜いよ。万燈は振廻せないよ。振廻さなくても宜いよ。僕が這入ると負けるが宜いかへ。負けても宜いのさ、それは仕方が無いと諦めるから、お前は何も為さないで宜いから唯横町の組だといふ名で、威張つてさへくると豪気に人氣がつくからね、己れはこんな無学漢だのにお前は学が出来るからね、向

ふの奴が漢語か何かで冷語でも言つたら、此方も漢語で仕かへしておくれ、ああ好い心持ださつぱりしたお前が承知をしてくれればもう千人力だ、信さん有がたうと常に無い優しき言葉も出るものなり。

一人は三尺帯に突かけ草履の仕事師の息子、一人はかわ色金巾の羽織に紫の兵子帯といふ坊様仕立、思ふ事はうらはらに、話しは常に喰ひ違ひがちなれど、長吉は我が門前に産声を揚げしものと大和尚夫婦が鼻負もあり、同じ学校へかよへば私立私立とけなされるも心わるきに、元來愛敬のなき長吉なれば心から味方につく者もなき憐れさ、先方は町内の若衆どもまで尻押をして、ひがみでは無し長吉が負けを取る事罪は田中屋がたに少なからず、見かけて頼まれし義理としても嫌やとは言ひかねて信如、それではお前の組に成るさ、成るといつたら嘘は無いが、なるべく喧嘩は為ぬ方が勝だよ、いよいよ先方が売りに出たら仕方が無い、何いざと言へば田中の正太郎位小指の先さと、我が力の無いは忘れて、信如は机の引出しから京都みやげに貰ひたる、小鍛冶の小刀を取出して見すれば、よく利れそうだねへと覗き込む長吉が顔、あぶなし此物を振廻してなる事か。

解かば足にもとどくべき毛髪を、根あがりに堅くつめて前髪大きく鬚おもたげの、緒しやぐ熊まといふ名は恐ろしけれど、此鬚をこの頃の流行とて良家の令嬢も遊ばさるるぞかし、色白に鼻筋とほりて、口もとは小さからねど締りたれば醜くからず、一つ一つに取たてては美人の鑑に遠けれど、物いふ声の細く清しき、人を見る目の愛敬あふれて、身のこなしの活々いきいきしたるは快き物なり、柿色に蝶鳥を染めたる大形の裕衣きて、黒襦子と染分絞りの昼夜帯胸だかに、足にはぬり木履ぼくりこころあたりにも多くは見かけぬ高きをはきて、朝湯の帰りに首筋白々と手拭さげたる立姿を、今三年の後に見たしと廓くるわがへりの若者は申き、大黒屋の美登利とて生国は紀州、言葉のいささか訛れるも可愛く、第一は切れ離れよき氣象を喜ばぬ人なし、子供に似合ぬ銀貨入れの重きも道理、姉なる人が全盛の余波なごり、延ひいては遣手新造が姉への世辞にも、美いちゃん人形をお買ひなされ、これはほんの手鞠代てまりだいと、くれるに恩を着せねば貰ふ身の有がたくも覚え、まきはまくは、同級の女生徒二十人に揃そろひのごむ鞠を与へしはおろかの事、馴染の筆やに店たなざらしの手遊あそびを買しめて喜ばせし事もあり、さりとて日々夜々にちにちややの散財この歳この身分にて叶ふべきにあらず、未は何となる身ぞ、両親ありながら大目に見てあらしき詞ことばをかけたる事も無

く、楼の主が大切がる様子も怪しきに、聞けば養女にもあらず親戚にてはもとより無く、
 姉なる人が身売りの当時、鑑定に來たりし楼の主が誘ひにまかせ、この地に活計もとむと
 て親子三人が旅衣、たち出しはこの訳、それより奥は何なれや、今は寮のあづかりをして
 母は遊女の仕立物、父は小格子の書記に成りぬ、この身は遊芸手芸学校にも通はせられて、
 そのほかは心のまま、半日は姉の部屋、半日は町に遊んで見聞くは三味に太鼓にあけ紫の
 なり形、はじめ藤色絞りの半襟を袷に掛けて着て歩くに、田舎者いなか者と町内の
 娘どもに笑はれしを口惜しがりて、三日三夜泣きつづけし事も有しが、今は我れより人々
 を嘲りて、野暮な姿と打つけの悪まれ口を、言ひ返すものも無く成りぬ。二十日はお祭り
 なれば心一ぱい面白い事をしてと友達のせがむに、趣向は何なりと各自に工夫して大勢
 の好事が好いでは無いか、幾金でもいい私が出すからとて例の通り勘定なしの引受けに、
 子供中間の女王様又とあるまじき恵みは大人よりも利きが早く、茶番にしよう、何処の
 か店を借りて往來から見えるやうにしてと一人が言へば、馬鹿を言へ、それよりはお神
 輿をこしらへておくれな、蒲田屋の奥に飾つてあるやうな本当のを、重くても構はしない、
 やつちよいやつちよい訳なしだと振ぢ鉢巻をする男子のそばから、それでは私たちがつま
 らない、皆が騒ぐを見るばかりでは美登利さんだとして面白くはあるまい、何でもお前の好

い物におしよと、女の一むれは祭りを抜きに常盤座をと、言ひたげの口振をかし、田中の正太は可愛らしい眼をぐるぐると動かして、幻燈にしないか、幻燈に、己れの処にも少しは有るし、足りないのを美登利さんに買つて貰つて、筆やの店で行らうでは無いか、己れが映し人で横町の三五郎に口上を言はせよう、美登利さんそれにしないかと言へば、あそれは面白からう、三ちゃんの口上ならば誰れも笑はずにはゐられまい、序にあの顔がうつると猶おもしろいと相談はととのひて、不足の品を正太が買物役、汗に成りて飛び廻るもをかし、いよいよ明日と成りては横町までもその沙汰聞えぬ。

四

打つや鼓のしらべ、三味の音色に事かかぬ場処も、祭りは別物、酉の市を除けては一年一度の賑ひぞかし、三嶋さま小野照さま、お隣社づから負けまじの競ひ心をかし、横町も表も揃ひは同じ真岡木綿に町名くづしを、去歳よりは好からぬ形とつぶやくも有りし、口なし染の麻だすきなるほど太きを好みて、十四五より以下なるは、達磨、木兎、犬はり子、さまざまの手遊を数多きほど見得にして、七つ九つ十一つくるもあり、大鈴小鈴背

中にがらつかせて、駆け出す足袋はだしの勇ましく可笑し、群れを離れて田中の正太が赤筋入りの印半天、色白の首筋に紺の腹がけ、さりとは見なれぬ扮粧とおもふに、しごいて締めし帯の水浅黄も、見よや縮緬の上染、襟の印のあがりも際立て、うしろ鉢巻きに山車の花一枝、革緒の雪駄おとのみはすれど、馬鹿ばやしの中間には入らざりき、夜宮は事なく過ぎて今日一日の日も夕ぐれ、筆やが店に寄合しは十二人、一人かけたる美登利が夕化粧の長さに、未だか未だかと正太は門へ出つ入りつして、呼んで来い三五郎、お前はまだ大黒屋の寮へ行つた事があるまい、庭先から美登利さんと言へば聞える筈、早く、早くと言ふに、それならば己れが呼んで来る、万燈は此処へあづけて行けば誰れも蠟燭ぬすむまい、正太さん番をたのむとあるに、吝嗇な奴め、その手間で早く行けと我が年したに叱かれて、おつと来たさの次郎左衛門、今の間とかけ出して韋駄天とはこれをや、あれあの飛びやうが可笑しいとて見送りし女子どもの笑ふも無理ならず、横ぶとりして背ひくく、頭の形は才槌とて首みぢかく、振むけての面を見れば出額の獅子鼻、反齒の三五郎といふ仇名おもふべし、色は論なく黒きに感心なは目つき何処までもおどけて両の頬に笑くぼの愛敬、目かくしの福笑ひに見るやうな眉のつき方も、さりとはをかしく罪の無き子なり、貧なれや阿波ちぢみの筒袖、己れは揃ひが間に合はなんだと知

らぬ友には言ふぞかし、我れを頭に六人の子供を、養ふ親も轆棒にすぎる身なり、五十軒によき得意場は持たりとも、内証の車は商買ものの外なれば詮なく、十三になれば片腕と一昨年より並木の活判処へも通ひしが、怠惰ものなれば十日の辛棒つづかず、一ト月と同じ職も無くて霜月より春へかけては突羽根の内職、夏は検査場の氷屋が手伝ひして、呼声をかしく客を引くに上手なれば、人には調法がられぬ、去年は仁和賀の台引きに出しより、友達いやしがりて万年町の呼名今に残れども、三五郎といへば滑稽者と承知して憎くむ者の無きも一徳なりし、田中屋は我が命の綱、親子が蒙むる御恩すくなからず、日歩とかや言ひて利金安からぬ借りなれど、これなくてはの金主様あだには思ふべしや、三公己れが町へ遊びに來いと呼ばれて嫌やとは言はれぬ義理あり、されども我れは横町に生れて横町に育ちたる身、住む地処は龍華寺のもの、家主は長吉が親なれば、表むき彼方に背く事かなはず、内々に此方の用をたして、にらまるる時の役廻りつらし。正太は筆やの店へ腰をかけて、待つ間のつれづれに忍ぶ恋路を小声にうたへば、あれ由断がならぬと内儀さまに笑はれて、何がなしに耳の根あかく、まちくないの高声に皆も來いと呼つれて表へ駆け出す出合頭、正太は夕飯なぜ喰べぬ、遊びに耄けて先刻から呼ぶをも知らぬか、誰様も又のちほど遊ばせて下され、これは御世話と筆やの妻にも挨拶して、祖母

が自からの迎ひに正太いやが言はれず、そのまま連れて帰らるるあとは俄かに淋しく、人数はさのみ変らねどあの子が見えねば大人までも寂しい、馬鹿さわぎもせねば串談も三ちやんの様では無けれど、人好きのするは金持の息子さんに珍らしい愛敬、何と御覽じたか田中屋の後家さまがいやらしさを、あれで年は六十四、白粉をつけぬがめつけ物なれど丸鬚の大きき、猫なで声して人の死ぬをも構はず、大方臨終は金と情死なさるやら、それでも此方どもの頭の上らぬはあの物の御威光、さりと欲しや、廓内の大きい楼にも大分の貸付があるらう聞きましたと、大路に立ちて二三人の女房よその財産を数へぬ。

五

待つ身につらき夜半の置炬燵、それは恋ぞかし、吹風すずしき夏の夕ぐれ、ひるの暑さを風呂に流して、身じまいの姿見、母親が手づからそけ髪つくろひて、我が子ながら美しくしきを立ちて見、居て見、首筋が薄かつたと猶ぞいひける、単衣は水色友仙の涼しげに、白茶金さんの丸帯少し幅の狭いを結ばせて、庭石に下駄直すまで時は移りぬ。

まだかまだかと堀へいの廻りを七度び廻り、欠伸あくびの数も尽きて、払ふとすれど名物の蚊に首筋額かぶたぎわしたたか整ととれ、三五郎弱よわりきる時、美登利立出でていざと言ふに、此方こなたは言葉もなく袖そでを捉とらへて駆け出せば、息がはづむ、胸が痛い、そんなに急ぐならば此方こちは知らぬ、お前一人でお出いでと怒られて、別れ別れの到着、筆やの店へ来し時は正太が夕飯の最中もなかとおぼえし。ああ面白くない、おもしろくない、あの人が来なければ幻燈をはじめるのも嫌、伯母さん此処ここの家に智恵の板は売りませぬか、十六武蔵むさしでも何でもよい、手が暇で困ると美登利の淋しがれば、それよと即坐はざまに鉢はちを借りて女子おなごづれは切抜きにかかる、男は三五郎を中に仁和賀のさらひ、北ほく廓くわく全盛見わたせば、軒ちようちん提燈電気燈、いつも賑にぎふ五丁町、と諸声もろこゑをかしくはやし立つるに、記憶おぼえのよければ去年一昨年こぞおとしとさかのぼりて、手振手拍子ひとつも変る事なし、うかれ立たる十人あまりの騒ぎなれば何事と門かどに立ちて人垣をつくりし中より、三五郎は居るか、一寸ちよつと来てくれ大急ぎだと、文次ぶんじといふ元結もとゆひよりの呼ぶに、何の用意もなくおいしよ、よし来たと身がるに敷居を飛こゆる時、この二夕股野郎またやらう覚悟をしろ、横町の面つらよごしめ唯ただは置かぬ、誰れだと思ふ長吉ながきちだ生なまふぎけた真似をして後悔するなど頬骨ほうぼね一撃うち、あつと魂消たまげて逃入る襟がみを、つかんで引出す横町の一むれ、それ三五郎をたたき殺せ、正太を引出してやつてしまへ、弱虫にげるな、団子屋の頼馬とんまも唯は

置かぬと潮うしほのやうに沸かへる騒ぎ、筆屋が軒の掛提燈は苦もなくたたき落されて、釣りら
んぷ危なし店先の喧嘩なりませぬと女房が喚わめきも聞かばこそ、人数にんずは大凡おほよそ十四五人、ね
ぢ鉢巻に大万燈ふりたてて、当るがままの乱暴狼藉らうぜき、土足に踏み込む傍若無人、目ざす
敵かたきの正太が見えねば、何処へ隠くした、何処へ逃げた、さあ言はぬか、言はぬか、言はさ
ずに置く物かと三五郎を取こめて撃つやら蹴けるやら、美登利くやくしく止める人を掻かきのけ
て、これお前がたは三ちやんに何の咎とががある、正太さんと喧嘩がしたくば正太さんとした
が宜い、逃げもせねば隠くしもしない、正太さんは居ぬでは無いか、此処は私が遊び処、
お前がたに指でもささしはせぬ、ゑゑ憎くらしい長吉め、三ちやんを何故なぜぶつ、あれ又引
たほした、意趣があらば私をお撃ぶち、相手には私になる、伯母さん止めずに下されと身も
だへして罵のしれば、何を女郎め頬ほたたく、姉の跡つぎの乞食め、手前てめへの相手にはこれが
相応だと多人数おほくのうしろより長吉、泥草履つかんで投げつけられ、ねらひ違たがはず美登利が額
際にむさき物したたか、血相かへて立あがるを、怪我でもしてはと抱きとむる女房、ざま
を見る、此方こちには龍華寺の藤本がついてゐるぞ、仕かへしには何時いつでも来い、薄馬鹿野郎
め、弱虫め、腰ぬけの活地いくじなしめ、帰りには待伏せする、横町の闇やみに気をつけろと三五郎
を土間に投出せば、折から靴音たれやらが交番への注進今ぞしる、それと長吉声をかくれ

ば丑松文次その余の十余人、方角をかへてばらばらと逃足はやく、抜け裏の露路にかがむも有るべし、口惜しいくやしい口惜しい口惜しい、長吉め文次め丑松め、なぜ己れを殺さぬ、殺さぬか、己れも三五郎だ唯死ぬものか、幽ゆうれいになつても取殺すぞ、覚えてゐろ長吉めと湯玉のやうな涙はらはらは、はては大声にわつと泣き出す、身内や痛からん筒袖の処々引さかれて背中も腰も砂まぶれ、止めるにも止めかねて勢ひの儘まじさに唯おどおどと気を呑まれし、筆やの女房走り寄りて抱きおこし、背中をなで砂を払ひ、堪忍をし、堪忍をし、何と思つても先方は大勢、此方は皆よわい者ばかり、大人でさへ手が出しかねたに叶はぬは知れてゐる、それでも怪我のないは仕合、この上は途中の待ぶせが危ない、幸ひの巡査さまに家まで見て頂かば我々も安心、この通りの子細で御座ります故と筋をあらあら折からの巡査に語れば、職掌がらいぎ送らんと手を取らるるに、いゑいゑ送つて下さらずとも帰ります、一人で帰りますと小さく成るに、こりや怕い事は無い、其方の家まで送る分の事、心配するなど微笑を含んで頭を撫でらるるに、弥々ちぢみて、喧嘩をしたと言ふと親父さんに叱かられます、頭の家は大屋さんで御座りますからとて凋れるをすかして、さらば門かどぐち口まで送つて遣る、叱からるるやうの事は為ぬわとて連れらるるに四隣の人胸を撫でてはるかに見送れば、何とかしけん横町の角にて巡査の手をば振はなして

一目散に逃げぬ。

六

めづらしい事、この炎天に雪が降りませぬか、美登利が学校を嫌やがるはよくよくの不機嫌、朝飯がすすまずば後刻のちかたに鮎やすけでも逃あつらへようか、風邪にしては熱も無ければ大方きのふの疲れと見える、太郎様への朝参りは母かかさんが代理してやれば御免こふむれとありしに、いゑいゑ姉ねえさんの繁はんじょう昌あきらするやうにと私が願ぐはんをかけたのなれば、参らねば気が済まぬ、お賽さいせん銭下され行つて来ますと家を駆け出して、中田圃なかたんぼの稻荷いなりに鰐わにぐち口くちならして手を合せ、願ねがひは何ぞ行きも帰りも首くびうなだれて畦あぜ道みちづたひ帰り来る美登利が姿、それと見て遠くより声をかけ、正太はかけ寄りて袂たもとを押へ、美登利さん昨夕ゆうべは御免よと突だしぬけ然けにあやまれば、何もお前に謝罪わびられる事は無い。それでも己おれが憎にくまれて、己おれが喧嘩けんわの相手だもの、お祖母おばあさんが呼びにさへ来なければ帰りはしない、そんなに無暗むやみに三五郎をも撃ぶたしはしなかつた物を、今朝けさ三五郎の処へ見に行つたら、彼奴あいつも泣いて口惜くやしがつた、己れは聞いてさへ口惜くやしい、お前の顔へ長吉め草履を投げたと言ふでは無いか、あの野郎

乱暴にもほどがある、だけれど美登利さん堪忍しておくれよ、己れは知りながら逃げたのでは無い、飯を掻込んで表へ出やうとするとお祖母さんが湯に行くといふ、留守居してゐるうちの騒ぎだらう、本当に知らなかつたのだからねと、我が罪のやうに平あやまりに謝罪て、痛みはせぬかと額際を見あげれば、美登利につこり笑ひて何負傷をするほどでは無い、それだが正さん誰れが聞いても私が長吉に草履を投げられたと言つてはいけな
いよ、もし万一お母さんが聞きでもすると私が叱かられるから、親でさへ頭にはあげぬものを、長吉づれが草履の泥を額にぬられては踏まれたも同じだからとて、背ける顔の
いとをしく、本当に堪忍しておくれ、みんな己れが悪るい、だから謝る、機嫌を直してく
れないか、お前に怒られると己れが困るものと話しつれて、いつしか我家の裏近く来れ
ば、寄らないか美登利さん、誰れも居はしない、祖母さんも日がけを集めに出たらうし、
己ればかりで淋しくてならない、いつか話した錦絵を見せるからお寄りな、種々のが
あるからと袖を捉らへて離れぬに、美登利は無言にうなづいて、佗びた折戸の庭口より入
れば、広からねども鉢ものをかしく並びて、軒につり忍艸、これは正太が午の日の買物と
見えぬ、理由しらぬ人は小首やかたぶけん町内一の財産家といふに、家内は祖母と此子二
人、万の鍵に下腹冷えて留守は見渡しの総長屋、さすがに錠前くたくもあらざりき、正太

は先へあがりて風入りのよき場処ところを見たてて、此処へ来ぬかと団扇うちわの気あつかひ、十三の
 子供にはませ過ぎてをかし。古くより持つたへし錦絵かずかず取出とりだし、褒めらるるを嬉
 しく美登利さん昔しの羽子板を見せよう、これは己れの母さんかかがお邸やしきに奉公してゐる頃い
 ただいたのだとき、をかしいでは無いかこの大きい事、人の顔も今のと違ふね、あそこ
 の母さんが生きてゐると宜いが、己れが三つの歳死としんで、お父さんとつは在るけれど田舎の実
 家へ歸つてしまつたから今は祖母さんおばあばかりさ、お前は浦山うらやましいねと無端そでうに親の事を言
 ひ出せば、それ絵がぬれる、男が泣く物では無いと美登利に言はれて、己れは気が弱い
 かしら、時々種々いろいろの事を思ひ出すよ、まだ今時分は宜いけれど、冬の月夜なにかに田町たまち
 あたりを集めに廻ると土手まで来て幾度も泣いた事がある、何さむい位で泣きはしない、
 何故だか自分も知らぬが種々の事を考へるよ、ああ一昨年おとしから己れも日がけの集めに廻る
 さ、祖母さんは年寄りだからそのうちにも夜るは危ないし、目が悪るいから印形いんげうを押た
 り何かに不自由だからね、今まで幾人いくたりも男を使つたけれど、老人としよりに子供だから馬鹿に
 して思ふやうには動いてくれぬと祖母さんが言つてゐたつけ、己れがもう少し大人に成る
 と質屋を出さして、昔しの通りでなくとも田中屋の看板をかけると楽しみにしてゐるよ、
 他処よその人は祖母さんを吝けちだと言ふけれど、己れの為に儉約つましくしてくれるのだから気の毒で

ならない、集金あつめに行くうちでも通新町とほりしんまちや何かなにかに随分可愛かわい想さうなのがあるから、さぞお祖母おばあさんを悪わるくいふだらう、それを考かんへると己おれれは涙なみだがこぼれる、やつぱり氣きが弱よわいのだね、今朝けさも三公さんこうの家うちへ取りに行つたら、奴やつめ身体からだが痛い癖くせに親父おやに知らずまいとして働はたらいてゐた、それを見たら己おれれは口くちが利きけなかつた、男おとこが泣なくてへのは可笑をかしいでは無ないか、だから横町よこまちの野蕃漢じやがたらに馬鹿ばかにされるのだと言いひかけて我が弱よわいを耻はづかしさうな顔色かほいろ、何心なにこころなく美登利みとりのりと見合みあす目めつきの可愛かわゆさ。お前の祭まつりの姿なりは大層おほまよく似合に合あつて浦山うらやましかつた、私も男おとこだとあんな風ふうがして見みたい、誰たれれよりも宜よろく見みえたと賞ほめられて、何なにだ己おれれなんぞ、お前まへこそ美うつくしいや、廓内なかにの大卷おほまきさんよりも奇麗みづかだと皆みんながいふよ、お前まへが姉あねであつたら己おれれはどんなに肩身かたみが広ひろかろう、何処どこへゆくにも追つ従いて行いつて大威張おほいばりに威張いばるがな、一人ひとりも兄弟あにが無ないから仕方しほうが無ない、ねへ美登利みとりのりさん今度いま一処ひととほに写真しやしんを取とらないか、我おれれは祭まつりりの時ときの姿なりで、お前は透綾すきやのあら縞しまで意氣いきな形なりをして、水道尻すいどうしりの加藤かとうでうつさう、龍華寺りゅうげの奴やつが浦山うらやましがるやうに、本当ほんとうだぜ彼奴あいつはきつと怒おこるよ、真青まゐに成なつて怒おこるよ、にゑ肝かただからね、赤あかくはならない、それとも笑わらふかしら、笑わらはれても搦かまはない、大きく取とつて看板かんばんに出いたら宜よろいな、お前は嫌いややかへ、嫌いややのやうな顔かほだものと恨うらめるもをかしく、変へんな顔かほにうつるとお前に嫌いやらはれるからとて美登利みとりのりふき出して、高笑たかわらひの美音みねに御機嫌ごきげんや直ただり

し。

朝冷あさすずはいつしか過ぎて日かげの暑くなるに、正太さん又晩によ、私の寮へも遊びにお出でな、燈籠とうろうながして、お魚追ひましょ、池の橋が直つたれば怕こわい事は無いと言ひ捨てに立たち出いる美登利の姿、正太うれしげに見送つて美しくと思ひぬ。

七

龍華寺の信如、大黒屋の美登利、二人ながら学校は育英舎なり、去りし四月の末つかた、桜は散りて青葉のかげに藤の花見といふ頃、春季の大運動会とて水みづの谷やの原にせし事ありしが、つな引、鞆まりなげ、縄とびの遊びに興をそへて長き日の暮るるを忘れし、その折の事とや、信如いかにしたるか平常へいぜいの沈おち着つきに似ず、池のほとりの松が根につまづきて赤土道に手をつきたれば、羽織たもとの袂も泥に成りて見にくかりしを、居あはせたる美登利みかねて我が紅くれなゐの絹はんけちを取とり出いし、これにてお拭ふきなされと介抱をなしけるに、友達の中なる嫉やきもち妬ねたや見つけて、藤本は坊主のくせに女と話をして、嬉うれしさうに礼を言つたは可笑をかしいでは無いか、大方美登利さんは藤本の女かみ房さんになるのであらう、お寺の女房なら大黒さ

まと言ふのだなどと取沙汰しける、信如元來かかる事を人の上に聞くも嫌ひにて、苦き顔して横を向く質なれば、我が事として我慢のなるべきや、それよりは美登利といふ名を聞くごとに恐ろしく、又あの事を言ひ出すかと胸の中もやくやして、何とも言はれぬ厭やな氣持なり、さりながら事ごとに怒りつける訳にもゆかねば、なるだけは知らぬ昧をして、平氣をつくりて、むづかしき顔をして遣り過ぎる心なれど、さし向ひて物などを問はれたる時の当惑さ、大方は知りませぬの一ト言にて済ませど、苦しき汗の身うちに流れて心ほそき思ひなり、美登利はさる事も心にとまらねば、最初は藤本さん藤本さんと親しく物いひかけ、学校退けての歸りがけに、我れは一足はやくて道端に珍らしき花などを見つぐれば、おくれし信如を待合して、これこんなうつくしい花が咲てあるに、枝が高く私には折れぬ、信さんは背が高ければお手が届きましよ、後生折つて下されと一むれの中にては年長なるを見かけて頼めば、さすがに信如袖ふり切りて行すぎる事もならず、さりとして人の思はくいよいよ愁らければ、手近の枝を引寄せて好悪かまはず申訳ばかりに折りて、投つけるやうにすたすたと行過ぎるを、さりとは愛敬の無き人と惘れし事も有しが、度かさなりての末には自ら故意の意地悪のやうに思はれて、人にはさもなきに我れにばかり愁らき処為をみせ、物を問へば碌な返事した事なく、傍へゆけば逃げる、はなしを為れば

怒る、陰氣らしい氣のつまる、どうして好いやら機嫌の取りやうも無い、あのやうなむづかしやは思ひのままに捻れて怒つて意地わるが為たいならんに、友達と思はずは口を利くも入らぬ事と美登利少し疝にさはりて、用の無ければ摺れ違ふても物いふた事なく、途中に逢ひたりとて挨拶など思ひもかけず、唯いつとなく二人の中に大川一つ横たはりて、舟も筏も此処には御法度、岸に添ふておもひおもひの道あるきぬ。

祭りは昨日に過ぎてそのあくる日より美登利の学校へ通ふ事ふつと跡たえしは、問ふまでも無く額の泥の洗ふても消えがたき耻辱を、身にしみて口惜しければぞかし、表町とて横町とて同じ教場におし並べば朋輩に成りは無き筈を、をかしき分け隔てに常日頃意地を持ち、我れは女の、とても敵ひがたき弱味をば付目にして、まつりの夜の処為はいかなる卑怯ぞや、長吉のわからずやは誰れも知る乱暴の上なしなれど、信如の尻おし無くはあれほどに思ひ切りて表町をば暴し得じ、人前をば物識らしく温順につくりて、陰に廻りて機関の糸を引しは藤本の仕業に極まりぬ、よし級は上にせよ、学は出来るにせよ、龍華寺さまの若旦那にせよ、大黒屋の美登利紙一枚のお世話にも預からぬ物を、あのやうに乞食呼はりして貰ふ恩は無し、龍華寺はどれほど立派な檀家ありと知らねど、我が姉さま三年の馴染に銀行の川様、兜町の米様もあり、議員の短小さま根曳して奥さまに

と仰せられしを、心意気に入らねば姉さま嫌ひてお受けはせざりしが、あの方とても世には名高きお人と遣手衆の言はれし、嘘ならば聞いて見よ、大黒やに大巻の居ずはあの楼は闇とかや、さればお店の旦那とても父さん母さん我が身をも粗畧には遊ばさず、常々大切がりて床の間にお据へなされし瀬戸物の大黒様をば、我れいつぞや坐敷の中にて羽根つくとして騒ぎし時、同じく並びし花瓶を仆し、散々に破損をさせしに、旦那次の方に御酒めし上りながら、美登利お転婆が過ぎるのと言はれしばかり小言は無かりき、他の人ならば一通りの怒りでは有るまじと、女子衆達にあとあとまで羨まれしも必竟は姉さまの威光ぞかし、我れ寮住居に人の留守居はしたりとも姉は大黒屋の大巻、長吉風情に負けを取るべき身にもあらず、龍華寺の坊さまにいちめられんは心外と、これより学校へ通ふ事おもしろからず、我ままの本性あなどられしが口惜しさに、石筆を折り墨をすて、書物も十露盤も入らぬ物にして、中よき友と婿も無く遊びぬ。

八

走れ飛ばせの夕べに引かへて、明けの別れに夢をのせ行く車の淋しさよ、帽子まぶかに

人目を厭ふ方様もあり、手拭とつて頬かぶり、彼女が別れに名残の一撃、いたさ身
 にしみて思ひ出すほど嬉しく、うす気味わるやにたにたの笑ひ顔、坂本へ出ては用心し給
 へ千住がへりの青物車にお足元あぶなし、三嶋様の角までは氣違ひ街道、御顔の
 しまり何れも緩るみて、はばかりながら御鼻の下ながながと見えさせ給へば、そんじよ
 其処らにそれ大した御男子様とて、分厘の価値も無しと、辻に立ちて御慮外を申もあり
 けり。楊家の娘君寵をうけてと長恨歌を引出すまでもなく、娘の子は何処にも貴
 重がらるる頃なれど、このあたりの裏屋より赫奕姫の生るる事その例多し、築地の某屋
 に今は根を移して御前さま方の御相手、踊りに妙を得し雪といふ美形、唯今のお座敷にて
 お米のなります木はと至極あどけなき事は申とも、もとは此町の巻帯党にて花がるたの
 内職せしものなり、評判はその頃に高く去るもの日々に疎ければ、名物一つかげを消して
 二度目の花は紺屋の乙娘、今千束町に新つた屋の御神燈ほのめかして、小吉と呼ば
 るる公園の尤物も根生ひは同じ此処の土成し、あけくれの噂にも御出世といふは女に限
 りて、男は塵塚さがす黒斑の尾の、ありて用なき物とも見ゆべし、この界限に若い
 衆と呼ばれる町並の息子、生意氣ざかりの十七八より五人組七人組、腰に尺八の伊達はな
 けれど、何とやら厳めしき名の親分が手下につきて、揃ひの手ぬぐひ長提燈、賽ころ振

る事おぼえぬうちは素見ひやかしの格子かうしき先に思ひ切つての串談じょうだんも言ひがたしとや、真面目
につとむる我が家業は昼のうちばかり、一風呂浴びて日の暮れゆけば突つきかけ下駄げんこに七五三
の着物、何屋の店の新妓しんこを見たか、金杉かなすぎの糸屋いとやが娘むすめに似てもう一倍鼻がひくいと、頭腦あたま
の中をこんな事にこしらへて、一軒ごとの格子かうしきに烟草たばこの無理どり鼻紙はなみの無心、打ちつ打た
れつこれを一世せの誉ほまれと心得れば、堅気かたきの家の相続息子しりぞ地廻りじまわと改名して、大門おほもんぎわ際に喧けんく
嘩わかひと出るもありけり、見よや女子おんなの勢いきほひ力ちからと言はぬばかり、春秋はるあきしらぬ五丁町の
賑にぎはひ、送りの提燈かんぼんいま流行はやらねど、茶屋ちやが廻女まわしの雪駄せつたのおとに響こたき通とほへる歌舞おんぎよく音曲おんぎよく、
うかれうかれて入込いりこむ人の何を目当こことと言問こととはば、赤糸あかり緒しやくま熊くまに裨うちかけ襠うちかけの裾すそながく、につ
と笑ふ口元くちもともと、何処よが美よいとも申がたけれど華魁おいらんしゆ衆しゆとて此処こゝにての敬うやまつひ、立たはなれ
ては知るによしなし、かかる中なかにて朝夕あさゆふを過あごせば、衣きぬの白地しろぢの紅べにに染しむ事無理ならず、
美登利みとの眼まなこの中に男おとこといふ者ものさつても怕こわからず恐おそろしからず、女郎ぢやうらうといふ者ものさのみ賤いやしき
勤こつとめとも思はねば、過ぎし故郷こきやうを出しゆつたつ立たの当時こゝろないて姉あねをば送りしこと夢ゆめのやうに思は
れて、今日けふこの頃の全盛ぜんせいに父母ふぼへの孝養けうやううらやましく、お職しやくを徹とほす姉あねが身みの、憂うれひの愁しゆら
いの数かずも知らねば、まち人恋ねづみふる鼠ねづみなき格子かうしきの咒文じゆもん、別わかれの背せ中に手加減てかへんの秘密ひそみまで、
唯ただおもしろく聞きなされて、廓くわくわことばを町まちにいふまで去いりとは耻はづかしからず思おもへるも哀あはれなり、

年はやうやう数への十四、人形抱いて頬ほずりする心は御華族のお姫様とて変りなけれど、
 修身の講義、家政学のいくたても学びしは学校にてばかり、誠あけくれ耳に入りしは好い
 た好かぬの客の風説うはき、仕着せ積み夜具茶屋への行ゆきわたり、派手は美事に、かなはぬは見す
 ぼらしく、人事我事分別をいふはまだ早し、幼な心に目の前の花のみはしるく、持まへの
 負けじ気性は勝手に馳はせ廻りて雲のやうな形をこしらへぬ、氣違ひ街道、寐ねぼれ道、朝が
 へりの殿がた一順すみて朝寐の町も門かどの箒はきめ目青海波をせいがいゑがき、打水よきほどに済みし
 表町の通りを見渡せば、来るは来るは、万年町山伏町、新谷町あたりを塙ねぐらにして、
 一能一術これも芸人の名はのがれぬ、よかよか飴あめや軽業師、人形つかひ大神楽、住吉
 をどりに角兵衛獅子かくべいしし、おもひおもひの扮粧いでたちして、縮緬ちりめんすきや透綾の伊達もあれば、薩摩さつまがす
 りの洗ひ着に黒襦子くろじゆすの幅狭帯はばせまおび、よき女もあり男もあり、五人七人十人一組の大たむろ
 もあれば、一人淋しき瘦せ老爺おやちの破れ三味線ざみせんかかへて行くもあり、六つ五つなる女の子に
 赤あか襷だすきさせて、あれは紀の国おどらすも見ゆ、お顧客せとくいは廓内かくないに居つづけ客のなぐさみ、
 女郎の憂さ晴らし、彼処かしこに入る身の生涯せうがいやめられぬ得分ありと知られて、来るも来るも
 此処らの町に細かしき貫もらひを心に止めず、裾すそに海草みるめのいかがはしき乞食さへ門かどには立たず
 行過ゆきすぎるぞかし、容貌きりようよき女太夫おんなだゆうの笠かさにかくれぬ床ゆかしの頬を見せながら、喉のど自慢じまん、

腕自慢、あれあの声をこの町には聞かせぬが憎くしと筆やの女房舌うちして言へば、店先に腰をかけて往來を眺めし湯がへりの美登利、はらりと下る前髪の毛を黄楊の櫛にちやつと搔きあげて、伯母さんあの太夫さん呼んで来ませうとて、はたはた駆けよつて袂にすがり、投げ入れし一品を誰れにも笑つて告げざりしが好みの明鳥さらりと唄はせて、又御鼻負をの嬌音これたやすくは買ひがたし、あれが子供の処業かと寄集りし人舌を巻いて太夫よりは美登利の顔を眺めぬ、伊達には通るほどの芸人を此処にせき止めて、三味の音、笛の音、太鼓の音、うたはせて舞はせて人の為ぬ事して見たいと折ふし正太に唄いて聞かせれば、驚いて呆れて己らは嫌やだな。

九

如是我聞、仏説阿弥陀經、声は松風に和して心のちりも吹払はるべき御寺様の庫裏より生魚あぶる烟なびきて、卵塔場に嬰子の襦袢ほしたるなど、お宗旨によりて構ひなき事なれども、法師を木のはしと心得たる目よりは、そぞろに醒く覚ゆるぞかし、龍華寺の大和尚身代と共に肥へ太りたる腹なり如何にも美事に、色つやの好きこと如何なる賞

め言葉を参らせたらばよかるべき、桜色にもあらず、緋桃の花でもなし、剃りたてたる頭
 より顔より首筋にいたるまで銅色の照りに一点のにごりも無く、白髪もまじる太き眉
 をあげて心まかせの大笑ひなさる時は、本堂の如来さま驚きて台座より転び落給は
 んかと危ぶまるるやうなり、御新造はいまだ四十の上を幾らも越さで、色白に髪は毛薄く、
 丸鬚も小さく結びて見ぐるしからぬまでの人がら、参詣人へも愛想よく門前の花屋が
 口悪る鼻もとかくの蔭口を言はぬを見れば、着ふるしの裕衣、総菜のお残りなどおの
 づからの御恩も蒙るなるべし、もとは檀家の一人成しが早くに良人を失なひて寄る辺なき
 身の暫時ここにお針やとひ同様、口さへ濡らさせて下さらばとて洗ひ濯ぎよりはじめて
 お菜ごしらへは素よりの事、墓場の掃除に男衆の手を助くるまで働けば、和尚さま経
 済より割出しての御不憫かかり、年は二十から違うて見ともなき事は女も心得ながら、行
 き処なき身なれば結句よき死場処と人目を耻ぢぬやうに成りけり、にがにがしき事なれど
 も女の心だて悪るからねば檀家の者もさのみは咎めず、総領の花といふを懐胎し頃、檀家
 の中にも世話好きの名ある坂本の油屋が隠居さま仲人といふも異な物なれど進めたてて
 表向きのものにしける、信如もこの人の腹より生れて男女二人の同胞、一人は如
 法の変屈ものにて一日部屋の中にまぢまぢと陰気らしき生れなれど、姉のお花は皮薄

の二重腮にぢゅうあじかわゆらしく出来たる子なれば、美人といふにはあらねども年頃といひ人の評判もよく、素人しろうとにして捨てて置くは惜しい物の中に加へぬ、さりとお寺の娘に左り棲ひだづまお釈迦しやくかが三味しやみひく世は知らず人の聞え少しは憚はばかられて、田町たまちの通りに葉茶屋の店を奇麗にしつらへ、帳場格子のうちにこの娘こを据へて愛敬を売らすれば、秤はかりの目はとにかく勘定しらずの若い者など、何がなしに寄つて大方毎夜十二時を聞くまで店に客のかけ絶えたる事なし、いそがしきは大和尚、貸金の取たて、店への見廻り、法用のあれこれ、月の幾い日は説教日の定めもあり帳面くるやら経よむやらかくては身躰からだのつづき難しと夕暮れの椽ゑ先んさきに花むしろを敷かせ、片肌ぬぎに団扇うちわづかひしながら大盃おほさかずきに泡盛あわもりをなみなみと注つがせて、さかなは好物の蒲焼かばやきを表町のむさし屋へあらい処をとの誂あつらへ、承りてゆく使ひ番は信如の役なるに、その嫌やなること骨にしみて、路を歩くにも上を見し事なく、筋向ふの筆やに子供づれの声を聞けば我が事を誂そしらるるか情なく、そしらぬ顔に鰻屋うなぎやの門かどを過ぎては四辺あたりに人目の隙すきをうかがひ、立戻つて駈け入る時の心地、我身限つて腥なまぐさきものは食べまじと思ひぬ。

父親てておや和尚とこは何処までもさばけたる人にて、少しは欲深の名にたてども人の風説うはさきに耳をかたぶけるやうな小胆にては無く、手の暇あらば熊手の内職もして見やうといふ気風なれ

ば、霜月の西とりには論なく門前の明地あきちに簪かんざしの店を開き、御新造に手拭ひかぶらせて縁喜いの宜いいのをと呼よばせる趣向、はじめは耻はかしき事に思おもひけれど、軒のきならび素人てわざの手業てわざにて莫ばくだ大いの儲もつけと聞きくに、この雑踏ざつの中ちゆうといひ誰たれも思おもひ寄よらぬ事ことなれば日暮ひぐれれよりは目めにも立たつまじと思案しよあんして、昼間ひるまは花屋はなやの女房にようぼうに手伝てでんはせ、夜よに入りては自みづ身みづをり立たて呼よつたつるに、欲ほなれやいつしか耻はかしさも失うせて、思おもはず声こゑだかに負おましよ負おましよと跡あとを追おふやうに成なりぬ、人波ひとなみにもまれて買手かひも眼まなこの眩くらみし折おなれば、現在ごぜ後世ごせねがひに一お昨日おとつひ来きたりし門前かどまへも忘れて、簪かんざし三本さんぽん七十五しちごじゅうご銭せんと懸かね直なすれば、五本ごぽんついたを三さん銭せんならばと直な切きつて行ゆく、世よはぬば玉たまの闇やみの儲もつけはこのほかにも有あるべし、信如しんにょはかかる事ことどもいかにも心こゝろぐるしく、よし檀家だんかの耳みみには入いらずとも近辺きんぺんの人々ひとびとが思おもわく、子供こども仲間なつみだちの噂うわさにも龍華寺りゅうわじでは簪かんざしの店みせを出いして、信のぶさんが母かかさんの狂きやう気面かひづらして売うつてゐたなどと言いはれもするやと耻はかしく、そんな事ことはよしにしたが宜よろう御坐ござりませうと止とめし事こともありしが、大和尚だいじやう大笑だいじやうひに笑わらひすてて、黙もくつてゐろ、黙もくつてゐろ、貴様きさまなどが知しらぬ事ことだわとて丸々まるまる相手あひまにしてはくれず、朝念あしたねん仏ぶつに夕勘定ゆふかんてい、そろばん手にしてにこにこと遊あそばさるる顔かほつきは我親われおやながら浅あましくして、何故なにゆゑその頭あたまをまるめ給たまひしぞと恨うらめしくもなりぬ。

もとより一腹いっぶく一対いったいの中に育そだちて他人たにん交まぜずの穩ゆかなる家いへの内うちなれば、さしてこの児こを陰かげ

気ものに仕立あげる種は無けれども、性来おとなしき上に我が言ふ事の用ひられねばとかくに物のおもしろからず、父が仕業も母の所作も姉の教育も、悉皆あやまりのやうに思はるれど言ふて聞かれぬものぞと諦めればうら悲しきやうに情なく、友朋輩は変屈者の意地わると目ざせども自ら沈みみる心の底の弱き事、我が蔭口を露ばかりもいふ者ありと聞けば、立出でて喧嘩口論の勇氣もなく、部屋にとち籠つて人に面の合はされぬ臆病至極の身なりけるを、学校にての出来ぶりといひ身分がらの卑しからぬにつけて然る弱虫とは知る者なく、龍華寺の藤本は生煮えの餅のやうに真があつて気になる奴と憎がるものも有けらし。

十

祭りの夜は田町の姉のもとへ使を吩咐附られて、更くるまで我家へ歸らざりければ、筆やの騒ぎは夢にも知らず、翌日になりて丑松文次その外の口よりこれこれであつたと伝へらるるに、今更ながら長吉の乱暴に驚けども済みたる事なれば咎めだてするも詮なく、我が名を仮りられしばかりつくづく迷惑に思われて、我が為したる事ならねど人々への気の

毒を身一つに脊負^{せおひ}たるやうの思ひありき長吉も少しは我が遣^やりそこねを耻^{はづ}かしう思ふかし
て、信如に逢^あはば小言や聞かんとその三四日は姿も見せず、やや余^{ほとほり}炎のさめたる頃に信
さんお前は腹を立つか知らないけれど時の拍子だから堪忍して置いてくんな、誰れもお前
正太^{あきす}が明巢とは知るまいでは無いか、何も女郎^{めらう}の一疋^{びき}位相手にして三五郎を擲^{なぐ}りたい事も
無かつたけれど、万^{まんどう}燈を振込んで見りやあ唯^{ただ}も帰れない、ほんの附景気につまらない事
をしてのけた、そりやあ己れが何処までも悪るいさ、お前の命^{いひつけ}令を聞かなかつたは悪る
からうけれど、今怒られては法^{かた}なしだ、お前といふ後だてが有るので己らあ大舟に乗つた
やうだに、見すてられちまつては困るだらうじや無いか、嫌やだどつてもこの組の大將で
居てくんねへ、さうどちばかりは組まないからとて面目ななさうに謝^{わび}罪られて見ればそれ
でも私^{わたし}は嫌やだとも言ひがたく、仕方が無い遣る処までやるさ、弱い者いぢめは此方^{こつち}の耻
になるから三五郎や美登利を相手にしても仕方が無い、正太に末社がついたらその時のこ
と、決して此方^{こつち}から手出しをしてはならないと留^{とど}めて、さのみは長吉をも叱^{しか}り飛ばさねど
再び喧嘩^{けんくわ}のなきやうにと祈られぬ。

罪のない子は横町の三五郎なり、思ふさまに擲^たかれて蹴^けられてその二三日は立居も苦し
く、夕ぐれ毎^{ごと}に父親^{てておや}が空^{からぐるま}車を五十軒の茶屋が軒まで運ぶにさへ、三公はどうかした

か、ひどく弱つてゐるやうだなと見知りの台屋に咎められしほど成しが、父親はお辞義の鉄てつとして目上の人に頭つむりをあげた事なく廓内なの旦那は言はずとももの事、大屋様地主様いづれの御無理も御ごもつとも尤と受ける質たちなれば、長吉と喧嘩してこれこれの乱暴に逢あひましたと訴へればとて、それはどうも仕方が無い大屋さんの息子さんでは無いか、此方こつちに理が有らうが先方さきが悪るからうが喧嘩の相手に成るといふ事は無い、謝罪わびて来い謝罪わびて来い途方も無い奴だと我子を叱りつけて、長吉がもとへあやまりに遣られる事必ひつちやう定ちやうなれば、三五郎は口惜くやしさを噛かみつぶして七日十日と程をふれば、痛みの場合なほの愈なほると共にそのうらめしさも何時いつしか忘れて、頭かしらの家の赤ん坊が守りをして二銭が駄賃をうれしがり、ねんねんよ、おころりよ、と背負しよひあるくさま、年はと問へば生意気ざかりの十六にも成りながらその大躰づつたいを耻かしげにもなく、表町へものこのこと出かけるに、何時も美登利と正太なまごが黓なまごりものに成つて、お前は性根しやうねを何処へ置いて来たとからかはれながらも遊びの中間は外れげりぎ。

春は桜の賑にぎわひよりかけて、なき玉菊が燈籠とうろうの頃、つづいて秋の新仁和賀しんにわかには十分間に車の飛ぶ事この通りのみにて七十五輛りやうと数へしも、二の替りさへいつしか過ぎて、赤蜻あかとんぼ蛉田圃ぼうつたんぼに乱るれば横堀うづつちに鶉うづつちなく頃も近づきぬ、朝夕あさゆふの秋風身にしみ渡りて上清じやうせいが

店の蚊遣香かやりこう 懐炉くわいろ 灰ばいに座をゆづり、石橋の田村やが粉挽こなひく白うすの音さびしく、角海老かどえびが時計の響ねきもそぞろ哀れの音を伝へるやうに成れば、四季絶間なき日暮里につぼりの火の光りもあれが人を焼く烟けぶりかとうら悲しく、茶屋が裏ゆく土手下の細道に落かかるやうな三味の音を仰いで聞けば、仲之町なかのてう芸者が冴さえたる腕うでに、君が情の仮寐かりねの床にと何ならぬ一ふし哀れも深く、この時節ときせめより通とむひ初はじめるは浮うかれ浮うかるる遊ゆふかく客かくならで、身にしみじみと実のあるお方のよし、遊女つしめあがりの去る女ひとが申まをき、このほどの事かかんもくだくだしや大音寺おおいん前にて珍めづらしき事は盲目按摩めくらあんまの二十ばかりなる娘、かなはぬ恋に不自由なる身を恨みづみて水の谷やの池いけに入い水みづしたるを新らしい事とて伝へる位なもの、八百屋の吉五郎きちごろうに大工だいいくの太吉たけきちがさつぱりと影を見せぬが何とかせしと問うふにこの一件であげられましたと、顔の真ま中なかへ指をさして、何の子細なく取立てて噂うはさをする者もなし、大路を見渡せば罪なき子供の三五人手を引つれて開ひらいた開ひらいた何の花ひらいたと、無心の遊びも自然と静かにて、廓くわくに通とほふ車の音のみ何時いつに交まわらず勇ましく聞えぬ。

秋あき雨あめしとしと降るかと思へばさつと音して運びくる様なる淋しみしき夜、通りすがりの客をば待たぬ店なれば、筆やの妻は宵よひのほどより表の戸をたてて、中に集まりしは例の美登利に正太郎、その外には小さき子供の二三人寄りて細きしやい螺いらいはじきの幼なげな事して遊ぶ

ほどに、美登利ふと耳を立てて、あれ誰れか買物に來たのでは無いか溝板を踏む足音がするといへば、おやさうか、己いらは少つとも聞かなかつたと正太もちうちうたこかいの手を止めて、誰れか中間が來たのでは無いかと嬉しがるに、門なる人はこの店の前まで來たりける足音の聞えしばかりそれよりはふつと絶えて、音も沙汰もなし。

十一

正太は潜りを明けて、ばあと云ひながら顔を出すに、人は二三軒先の軒下をたどりて、ぼつぼつと行く後影、誰れだ誰れだ、おいお這入よと声をかけて、美登利が足駄を突かけばきに、降る雨を厭はず駆け出さんとせしが、ああ彼奴だと一ト言、振かへつて、美登利さん呼んだつても來はしないよ、一件だもの、と自分の頭を丸めて見せぬ。

信さんかへ、と受けて、嫌やな坊主つたら無い、きつと筆か何か買ひに來ただけけれど、私たちが居るものだから立聞きをして歸つたのであらう、意地悪るの、根性まがりの、ひねっこびれの、吃りの、齒かけの、嫌やな奴め、這入つて來たら散々と窘めてやる物を、歸つたは惜しい事をした、どれ下駄をお貸し、一寸見てやる、とて正太に代つて顔を出せ

ば軒の雨だれ前髪に落ちて、おお気味が悪ると首を縮めながら、四五軒先の瓦斯燈の下を大黒傘肩にして少しうつむいてゐるらしくとぼとぼと歩む信如の後かげ、何時までも、何時までも見送るに、美登利さんどうしたの、と正太は怪しがりて背中をつつきぬ。

どうもしない、と気の無い返事をして、上へあがつて細螺を数へながら、本当に嫌やな小僧とつては無い、表向きに威張つた喧嘩は出来もしないで、温順しさうな顔ばかりして、根性がくすくすしてゐるのだもの憎くらしからうでは無いか、家の母さんが言ふてゐたつけ、瓦落々々してゐる者は心が好いのだと、それだからくすくすしている信さん何かは心が悪るいに相違ない、ねへ正太さんさうであらう、と口を極めて信如の事を悪く言へば、それでも龍華寺はまだ物が解つてゐるよ、長吉と来たらあれははやと、生意気に大人の口を真似れば、お廃しよ正太さん、子供の癖にませた様でをかしい、お前は余つぽど黠ひやうきんやうきん 軽やうきん ものだね、とて美登利は正太の頬をつついて、その真面目がほはと笑ひこけるに、己らだつても最少し経ては大人になるのだ、蒲田屋の旦那のやうに角袖外套か何か着てね、祖母さんがしまつて置く金時計を貰つて、そして指輪もこしらへて、巻烟草を吸つて、履く物は何が宜からうな、己らは下駄より雪駄が好きだから、三枚裏にして襦袢

の鼻緒といふのを履くよ、似合ふだらうかと言へば、美登利はくすくす笑ひながら、背の低い人が角袖外套に雪駄ばき、まあどんなにか可笑しからう、目薬の瓶が歩くやうであらうと誹すに、馬鹿を言つていらあ、それまでには己らだつて大きく成るさ、こんな小つぽけでは居ないと威張るに、それではまだ何時の事だか知れはしない、天井の鼠があれ御覽と指をさすに、筆やの女房を始めとして座にある者みな笑ひころげぬ。

正太は一人真面目に成りて、例の目の玉ぐるぐるとさせながら、美登利さんは冗談にしてゐるのだね、誰れだつて大人に成らぬ者は無いに、己らの言ふが何故をかしからう、綺麗な嫁さんを貰つて連れて歩くやうに成るのだがなあ、己らは何でも奇麗のが好きだから、煎餅やお福のやうな痘痕づらや、薪やお出額のやうなが万一来ようなら、直さま追出して家へは入れて遣らないや、己らは痘痕と湿つかきは大嫌ひと力を入れるに、主人の女は吹出して、それでも正さん宜く私が店へ来て下さるの、伯母さんの痘痕は見えぬかえと笑ふに、それでもお前は年寄りだもの、己らの言ふのは嫁さんの事さ、年寄りはどうでも宜いとあるに、それは大失敗だねと筆やの女房おもしろづくに御機嫌を取りぬ。

町内で顔の好いのは花屋のお六さんに、水菓子やの喜いさん、それよりも、それよりもずんと好いはお前の隣に据つてお出なさるのなれど、正太さんはまあ誰れにしようと思つて極め

てあるえ、お六さんの眼つきか、喜いさんの清きよ元もとか、まあどれをえ、と問はれて、正太顔を赤くして、何だお六づらや、喜い公、何処どこが好い者かと釣りらんぷの下を少し居退ゐのきて、壁際かべぎわの方へと尻込しりごみをすれば、それでは美登利さんが好いのであらう、さう極めて御座んすの、と凶星をさされて、そんな事を知る物か、何だそんな事、とくるり後を向いて壁の腰ばりを指でたたきながら、廻れ廻れ水みづぐるま車を小音おんに唱うたひ出す、美登利は衆人おほくの細螺を集めて、さあもう一度はじめからと、これは顔をも赤らめざりき。

十二

信如しんごが何時も田町へ通ふ時、通らでも事は済めども言はば近道の土手どて々まへ前に、仮かり初のすだれ格子門かうしもん、のぞけば鞍馬くらまの石燈籠いしどうろうに萩はぎの袖垣そでがきをらしう見えて、椽ゑん先さきに巻きたる簾すだれのさまもなつかしう、中がらすの障子のうちには今いま様のやう按察あぜちの後室こうしつが珠数じゆずをつまぐつて、冠かぶつ切りのき若わかむらさき紫むらさきも立たち出いるやと思はるる、その一卜かま構かまへが大黒屋の寮なり。

昨日きのふも今日きのうも時雨しぐれの空に、田町の姉より頼みの長胴着が出来たれば、暫時すこしも早う重ねさせたき親心、御苦勞でも学校まへの一寸まの間に持つて行つてくれまいか、定めて花も待つ

てるようほどこに、と母親よりの言ひつけを、何も嫌やとは言ひ切られぬ温順しさに、唯はいはいと小包みを抱へて、鼠小倉の緒のすがりし朴木齒の下駄ひたひたと、信如は雨傘さしかぎして出ぬ。

お歯ぐる溝の角より曲りて、いつも行くなる細道をたどれば、運わるう大黒やの前まで来し時、さつと吹く風大黒傘の上を掴みて、宙へ引あげるかと疑ふばかり烈しく吹けば、これは成らぬと力足を踏こたゆる途端、さのみに思はざりし前鼻緒のずるずると抜けて、傘よりもこれこそ一の大事に成りぬ。

信如こまりて舌打はすれども、今更何と法のなければ、大黒屋の門に傘を寄せかけ、降る雨を庇に厭ふて鼻緒をつくろふに、常々仕馴れぬお坊さまの、これは如何な事、心ばかりは急れども、何としても甘くはすげる事の成らぬ口惜しさ、ぢれて、ぢれて、袂の中から記事文の下書きして置いた大半紙を掴み出し、ずんずんと裂きて紙縷をよるに、意地わるの嵐までもや落し来て、立かけし傘のころろと転り出るを、いまましい奴めと腹立たしげにいひて、取止めんと手を延ばすに、膝へ乗せて置きし小包み意久地もなく落ちて、風呂敷は泥に、我着る物の袂までを汚しぬ。

見るに気の毒なるは雨の中の傘なし、途中に鼻緒を踏み切りたるばかりは無し、美登利

は障子の中ながら硝子^{がらす}ごしに遠く眺めて、あれ誰れか鼻緒を切つた人がある、母^{かか}さん切れを遣つても宜う御座んすかと尋ねて、針箱の引出しから友仙ちりめんの切れ端をつかみ出し、庭下駄はくも鈍^{もど}かしきやうに、馳^はせ出でて椽先の洋傘^{かうもり}さすより早く、庭石の上を伝ふて急ぎ足に來たりぬ。

それと見るより美登利の顔は赤う成りて、どのやうの大事にでも逢^あひしやうに、胸の動^ど悸^{うき}の早くうつを、人の見るかと背後^{うしろ}の見られて、恐る恐る門の傍^{そば}へ寄れば、信如もふつと振返りて、これも無言に脇^{わき}を流るる冷汗、跣^{はだし}足に成りて逃げ出したき思ひなり。

平常^{つね}の美登利ならば信如が難義^{たがひ}の体^{てい}を指さして、あれあれあの意久地なしと笑ふて笑ひ抜いて、言ひたいままの悪^{にく}まれ口、よくもお祭りの夜^よは正太さんに仇^{あだ}をするるとて私たちが遊びの邪魔をさせ、罪も無い三ちゃんを擲^たかせて、お前は高見で采配^{さいはい}を振つてお出^{いで}なされたの、さあ謝罪^{あやまり}なさんすか、何とて御座んす、私の事を女郎女郎と長吉づらに言はせるのもお前の指図、女郎でも宜^いいでは無いか、塵^{ちり}一本お前さんが世話には成らぬ、私には父^{とと}さんもあり母^{かか}さんもあり、大黒屋の旦那も姉さんもある、お前のやうな腥^{なまくさ}のお世話には能^ようならぬほどに、余計な女郎呼^{よば}はり置いて貰ひましょ、言ふ事があらば陰のくすくすならで此^こ処でお言ひなされ、お相手には何時^{いつ}でも成つて見せます、さあ何とて御座ん

す、と袂を捉らへて捲しかくる勢ひ、さこそは当り難うもあるべきを、物いはず格子のかげに小隠れて、さりとして立去るでも無しに唯うぢうちと胸とどろかすは平常の美登利のさまにては無かりき。

十三

此処は大黒屋のと思ふ時より信如は物の恐ろしく、左右を見ずして直あゆみに為しなれども、生憎の雨、あやにくの風、鼻緒をさへに踏切りて、詮なき門下に紙縷を纏る心地、憂き事さまさまにどうも堪へられぬ思ひの有しに、飛石の足音は背より冷水をかけられるが如く、顧みねどもその人と思ふに、わなわなと慄へて顔の色も変わるべく、後向きに成りて猶も鼻緒に心を尽すと見せながら、半は夢中にこの下駄いつまで懸りても履ける様には成らんともせざりき。

庭なる美登利はさしのぞいて、ゑゑ不器用なあんな手つきしてどうなる物ぞ、紙縷は婆々縷、藁しべなんぞ前壺に抱かせたとて長もちのする事では無い、それぞれ羽織の裾が地について泥に成るは御存じ無いか、あれ傘が転がる、あれを畳んで立てかけて置けば好

いにと一々鈍^{もど}かしう齒がゆくは思へども、此処に裂^きれが御座んす、此裂^{これ}でおすげなされと
 呼かくる事もせず、これも立尽して降雨袖に侘^{わび}しきを、厭^{いと}ひもあへず小隠^{うかが}れて覗^{うかが}ひしが、
 さりとも知らぬ母の親はるかに声を懸けて、火のしの火が熾^{おこ}りましたぞえ、この美登利さ
 んは何を遊んでゐる、雨の降るに表へ出たの悪^{いたづら}戯は成りませぬ、又この間のやうに風引
 かうぞと呼立てられるに、はい今行^{ゆき}ますと大きく言ひて、その声信如に聞えしを耻^{はづ}かしく、
 胸はわくわくと上氣して、どうでも明けられぬ門の際^{きわ}にさりとも見過しがたき難義をさま
 ざまの思案尽して、格子の間より手に持つ裂れを物いはず投げ出^{いだ}せば、見ぬやうに見て知
 らず顔を信如のつくるに、ゑゑ例^{いつも}の通りの心根と遣^やる瀬なき思ひを眼に集めて、少し涙の
 恨み顔、何を憎んでそのやうに無^{つれなき}情そぶりは見せらるる、言ひたい事は此方^{こなた}にあるを、
 余りな人とこみ上^{あぐ}るほど思ひに迫れど、母親の呼声しばしばなるを侘^わしく、詮^{せん}方^{かた}なきに
 一ト足二タ足ゑゑ何ぞいの未練くさい、思はく耻かしと身をかへして、かたかたと飛石を
 伝ひゆくに、信如は今ぞ淋しう見かへれば紅^{べにい}入り友仙の雨にぬれて紅葉^{もみぢ}の形^{かた}のうるはしき
 が我が足ちかく散^{ちり}ぼひたる、そぞろに床^{ゆか}しき思ひは有れども、手に取あぐる事をもせず空^{むな}
 しく眺めて憂き思ひあり。

我が不器用をあきらめて、羽織^{ひも}の紐の長きをはづし、結^{ゆわ}ひつけにくるくと見とむなき

間に合せをして、これならばと踏ふみこころむ試こころむるに、歩あきにくき事言ふばかりなく、この下駄げだで田町まで行く事かと今さら難義なんぎは思へども詮方せんぽうなくて立上たる信如しんじゆ、小包こづつみみを横よこに二タ足ふたあしばかりこの門かどをはなるるにも、友仙ともせんの紅葉目もみぢめに残りて、捨てて過あぐるにしのび難がたく心残りこころざしりして見返みかへれば、信さんどうした鼻緒はなぢを切つたのか、その姿なりはどうだ、見ツとも無いなど不意ふいに声を懸かくる者のあり。

驚おどいて見かへるに暴あれ者の長吉ながきち、いま廓内なかつよりの帰かへりと覺おぼしく、裕衣ゆかたを重ねかさねし唐棧とうざんの着物きものに柿色かきいろの三尺さんせきを例いづもの通り腰こしの先さきにして、黒八くろはちの襟えりのかかつた新あららしい半天半天、印いんの傘かさをさしかざし高足たかあしだ駄だの爪つま皮かわも今朝けさよりはしるき漆しの色いろ、きわぎわしう見みえて誇こほらし氣きなり。

僕は鼻緒はなぢを切きつてしまつてどう為しようかと思おもつてゐる、本ほん当とうに弱よつてゐるのだ、と信如しんじゆの意久いぢう地ぢなき事ことを言いへば、そうだらうお前に鼻緒はなぢの立たちツつこは無い、好おいや己おれのお下駄げだを履はいて行ゆねへ、この鼻緒はなぢは大だい丈じやう夫ぶだよといふに、それでもお前まへが困こるだらう。何なに己おれは馴なれた物ものだ、かうやつてかうすると言いひながら急あわただ遽たしう七分三分しちぶんさんぶんに尻端しりはしをり折をりて、そんな結ゆわひつわけなんぞよりこれが爽さつぱり快ただと下駄げだを脱はぐに、お前まへ跣はだし足あしに成なるのかそれでは氣きの毒どくだと信如しんじゆ困こり切きるに、好おいよ、己おれは馴なれた事ことだ信さんなんぞは足あしの裏うらが柔ならかいから跣はだし足あしで石いし

ごろ道は歩けない、さあこれを履いてお出で、と揃へて出す親切き、人には疫病神のやうに厭はれながらも毛虫眉毛を動かして優しき詞のもれ出るぞをかしき。信さんの下駄は己れが提げて行かう、台処へ抛り込んで置たら子細はあるまい、さあ履き替へてそれをお出しと世話をやき、鼻緒の切れしを片手に提げて、それなら信さん行てお出、後刻に学校で逢はうぜの約束、信如は田町の姉のもとへ、長吉は我家の方へと行別れるに思ひの止まる紅入の友仙は可憐しき姿を空しく格子門の外にと止めぬ。

十四

この年三の酉まで有りて中一日はつぶれしかど前後の上天氣に大鳥神社の賑ひすさまじく、此処をかこつげに検査場の門より乱れ入る若人達の勢ひとは、天柱くだけ地維かくるかと思はるる笑ひ声のどよめき、中之町の通りは俄に方角の替りしやうに思はれて、すみてうきようまちとこころとこころ

角町 京町 処々 のはね橋より、さつき押せ押せと猪牙がかつた言葉に人波を分くる群もあり、河岸の小店の百疋づりより、優にうづ高き大籬の楼上まで、絃歌の声のさまざまに沸き来るやうな面白さは大方の人おもひ出でて忘れぬ物に思すも有るべし。

正太はこの日日がけの集めを休ませ貫ひて、三五郎が大頭おほがしらの店を見舞ふやら、団子屋の背高せいたかが愛想あいそげのない汁粉あじこやを音づれて、どうだ儲けまうがあるかえと言へば、正さんお前まへ好い処へ来た、我れおが餡あんこの種なしに成つてもう今からは何を売らう、直様煮すぐさまかけては置いたけれど中途なかたひお客は断れない、どうしような、と相談を懸けられて、智恵無しの奴めおほなべ大鍋おほなべの四辺ぐるりにそれツ位無駄がついてゐるでは無いか、それへ湯を廻して砂糖さへ甘くすれば十人前や二十人は浮いて来よう、何処でも皆なそうするのだお前の店とこばかりではない、何この騒ぎの中で好悪よあしを言ふ物が有らうか、お売りお売りと云ひながら先に立つて砂糖の壺を引寄すれば、目ツかちの母親おどろいた顔をして、お前さんは本当に商人あきんどに出来てゐなさる、恐ろしい智恵者だと賞めるに、何だこんな事が智恵者な物か、今横町の潮吹きとこの処で餡あんが足りないツてこうやつたを見て来たので己れの発明では無い、と言ひ捨てて、お前は知らないか美登利さんの居る処を、己れは今朝から探してゐるけれど何処どこへ行たか筆やへも来ないと言ふ、廓内なつかだらうかなと問へば、むむ美登利さんは今の先己れの家の前を通つて揚屋町あげやまちの刎橋はねばしから這入はいつて行た、本当に正さん大変だぜ、今日はね、髪をかういふ風にこんな嶋田しまだに結つてと、変てこな手つきして、奇麗だねあの娘こはと鼻はなを拭ふつと言へば、大卷さんより猶美なほいいや、だけれどあの子も華魁おいらんに成るのでは可憐かわいさうだと下

を向ひて正太の答ふるに、好いじやあ無いか華魁になれば、己れは来年から際物屋きわものやに成つてお金をこしらへるがね、それを持つて買ひに行くのだと頓馬とんまを現はすに、洒落しやらくさい事を言つてゐらあそうすればお前はきつと振られるよ。何故なぜ何故。何故でも振られる理由わけが有るのだもの、と顔を少し染めて笑ひながら、それじやあ己れも一廻りして来ようや、又後のちに来るよと捨て台辞ぜりふして門かどに出て、十六七の頃までは蝶てふよ花よと育てられ、と怪しきふるへ声にこの頃此処の流行はやりぶしを言つて、今では勤めが身にしてみてと口の内にくり返し、例の雪駄せつたの音たかく浮きたつ人の中に交りて小さき身体からだは忽たちまちに隠れつ。

揉もまれて出し廊いでくるわの角、向ふより番頭ばんとうしんぞ新造のお妻つまと連れ立ちて話しながら来るを見れば、まがひも無き大黒屋の美登利なれども誠に頓馬の言ひつる如く、初々ういういしき大嶋田結ひ綿のやうに絞りばなしふさふさとかけて、鼈べつかう甲かのさし込、総ふさぎつきの花かんざしひらめかし、何時いつよりは極彩色ごくさいしきのただ京人形を見るやうに思はれて、正太はあつとも言はず立止まりしまま例いつもの如くは抱きつきもせで打守るに、彼方こなたは正太さんかとして走り寄り、お妻どんお前買ひ物が有らばもう此処でお別れにしましよ、私はこの人と一処に帰ります、左様ならとて頭かしらを下げるに、あれ美いちやんの現金な、もうお送りは入りませぬとかえ、そんなら私は京町で買物しましよ、とちよこちよこ走りに長屋の細道へ駆け込むに、正太はじめて

美登利の袖そでを引いて好く似合ふね、いつ結つたの今朝けさかへ昨日かへ何故はやく見せてはくれなかつた、と恨めしげに甘ゆれば、美登利打しほれて口重く、姉さんの部屋で今朝結つて貰つたの、私は厭いややでしょうが無い、とさし俯うつむ向きて往来ゆききを耻ぢぬ。

十五

憂うれく耻はかしく、つつましき事身まにあれば人の褒あざけめるは嘲あざけりと聞なされて、嶋田まげの鬚まげのなつかしさに振かへり見る人たちをば我われれを蔑さげすむ眼つきと察とられて、正太わたしさん私うちは自宅うちへ帰るよと言ふに、何故今日は遊ばないのだらう、お前何か小言せうごを言はれたのか、大巻けんくわさんと喧嘩けんくわでもしたのでは無いか、と子供らしい事を問はれて答へは何と顔の赤むばかり、連れ立ちて団子屋の前を過ぎるに頓馬とんばは店より声をかけてお中よろが宜よろしう御座ございますと仰山おんさんな言葉を聞くより美登利は泣きたいやうな顔つきして、正太せいさん一処いっしょに来ては嫌いややだよと、置きざりに一人足を早めぬ。

お西さまへ諸もろとも共ともにと言ひしを道引ひきたが違がへて我が家やの方かたへと美登利の急ぐに、お前一処いっしょには来てくれないのか、何故其方そつちへ帰つてしまふ、余あんまりだぜと例の如く甘へてかかるを振

切るやうに物言はず行けば、何の故とも知らねども正太は呆れて追ひすがり袖を止めては怪しがるに、美登利顔のみ打赤めて、何でも無い、と言ふ声理由あり。

寮の門をばくぐり入るに正太かねても遊びに来馴れてさのみ遠慮の家にもあらねば、跡より続いて椽先からそつと上るを、母親見るより、おお正太さん宜く来て下さった、今朝から美登利の機嫌が悪くて皆なあぐねて困つてゐます、遊んでやつて下されと言ふに、正太は大人らしい惶りて加減が悪いのですかと真面目に問ふを、いいえ、と母親怪しき笑顔をして少し経てば愈りませう、いつでも極りの我まま様、さぞお友達とも喧嘩しませうな、真実やり切れぬ嬢さまではあるとて見かへるに、美登利はいつか小座敷に蒲団抱き巻持出でて、帯と上着を脱ぎ捨てしばかり、うつ伏し臥して物をも言はず。

正太は恐る恐る枕もとへ寄つて、美登利さんどうしたの病気なのか心持が悪いのか全体どうしたの、ときのみは摺寄らず膝に手を置いて心ばかりを悩ますに、美登利は更に答へも無く押ゆる袖にしのみ音の涙、まだ結びこめぬ前髪の毛の濡れて見ゆるも子細ありとはしるけれど、子供心に正太は何と慰めの言葉も出さず唯ひたすらに困り入るばかり、全体何がどうしたのだらう、己れはお前に怒られる事はしもしないに、何がそんなに腹が立つのと覗き込んで途方にくるれば、美登利は眼を拭ふて正太さん私は怒つてゐるのでは有りま

せん。

それならどうしてと問はれれば憂き事さまごまこれはどうでも話しのほかの包ましきなれば、誰れに打明けいふ筋ならず、物言はずして自づと頬ほほの赤うなり、さして何とは言はれねども次第次第に心細き思ひ、すべて昨日の美登利の身に覚えなかりし思ひをまうけて物の耻かしき言ふばかりなく、成事なることならば薄暗き部屋のうちに誰れたとて言葉をかけもせず我が顔ながむる者なしに一人気ままの朝夕をへ経たや、さらばこの様やうの憂き事ありとも人目つつましからずはかくまで物は思ふまじ、何時までも何時までも人形と紙雛あねさまとをあひ手にして飯事まめごとばかりしてゐたらばさぞかし嬉しき事ならんを、ゑゑ厭や厭や、大人に成るは厭やな事、何故なぜこのやうに年をば取る、もう七月十月、一年も以前もとへ帰りたいにと老人としよりじみた考へをして、正太の此処にあるをも思はれず、物いひかければ悉く蹴こちらして、帰つておくれ正太さん、後生ごせうだから帰つておくれ、お前が居ると私は死んでしまふであらう、物を言はれると頭痛がする、口をき利くと目がまわる、誰れも誰れも私の処へ来ては厭やなれば、お前も何卒どうぞ帰つてと例に似合ぬ愛想あいそづかし、正太は何故なにとも得ぞ解きがたく、烟のうちにあるやうにてお前はどうしても変てこだよ、そんな事を言ふ筈はずは無いに、可怪をかしい人だね、とこれはいささか口惜くちをしき思ひに、落ついて言ひながら目には気弱の涙

のうかぶを、何とてそれに心を置くべき帰つておくれ、帰つておくれ、何時まで此処に居てくれればもうお友達でも何でも無い、厭やな正太さんだと憎くらしげに言はれて、それならば帰るよ、お邪魔さまで御座いましたとて、風呂場に加減見る母親には挨拶もせず、ふいと立つて正太は庭先よりかけ出しぬ。

十六

真一文字に駆けて人中を抜けつ潜りつ、筆屋の店へをどり込めば、三五郎は何時か店をば売しまふて、腹掛のかくしへ若干金をぢやらつかせ、弟妹引つれつつ好きな物をば何でも買への大兄様、大愉快の最中へ正太の飛込み来しなるに、やあ正さん今お前をば探してゐたのだ、己れは今日は大分の儲けがある、何か奢つて上やうかと言へば、馬鹿をいへ手前に奢つて貰ふ己れでは無いわ、黙つてゐる生意氣は吐くなど何時になく荒らい事を言つて、それどころでは無いとて鬱ぐに、何だ何だ喧嘩かと言へば、喰べかけの餡ぱんを懐中に捻ぢ込んで、相手は誰れだ、龍華寺か長吉か、何処で始まつた廓内か鳥居前か、お祭りの時とは違ふぜ、不意でさへ無くは負けはしない、己れが承知だ先棒は振らあ、正さん胆

ツ玉をしつかりして懸りねへ、と競ひかかるに、ゑゑ気の早い奴め、喧嘩では無い、とてさすがに言ひかねて口を噤めば、でもお前が大層らしく飛込んだから己れは一途に喧嘩かと思つた、だけれど正さん今夜はじまらなければもうこれから喧嘩の起りッこは無いね、長吉の野郎片腕がなくなる物と言ふに、何故どうして片腕がなくなるのだ。お前知らずか己れも唯たつたいま今うちの父とつさんが龍華寺の御新造と話してゐたを聞いたのだが、信さんともう近々何処かの坊さん学校へ這入るのだとき、衣ころもを着てしまへば手が出ねへや、空からつきりあんな袖のぺらぺらした、恐ろしい長い物を捲り上るのだからね、さうなれば来年から横町も表も残らずお前の手下だよと煽そやすに、廃よしてくれ二銭貰ふと長吉の組に成るだらう、お前みたやうのが百人中間なかまに有たとて少ちつとも嬉しい事は無い、着きたい方へ何方どこへでも着きねへ、己れは人は頼まない真ほんの腕ツこで一度龍華寺とやりたかつたに、他よそへ行かれては仕方が無い、藤本は来年学校を卒業してから行くのだと聞いたが、どうしてそんなに早く成つたらう、為しやう様の無い野郎だと舌打しながら、それは少しも心に止まらねども美登利が素振のくり返されて正太は例の歌も出ず、大路の往來ゆききの夥おびただしきさへ心淋しければ賑やかなりとも思はれず、火ともし頃より筆やが店に転がりて、今日の西とりの市目茶々々に此処も彼かしこ処も怪しき事成りき。

美登利はかの日を始めにして生れかはりし様の身の振舞、用ある折は廓の姉のもとにこそ通へ、かけても町に遊ぶ事をせず、友達さびしがりて誘ひにと行けば今に今にと空約からやく束そくはてし無く、さしもに中よし成けれど正太とさへに親しまず、いつも耻かし氣に顔のみ赤めて筆やの店に手踊の活かつぱつ澆せうさは再び見るに難かたく成ける、人は怪しがりて病ひの故せかと危ぶむも有れども母親一人ほほ笑みては、今にお侠きやんの本性は現れまする、これは中休みと子細わけありげに言はれて、知らぬ者には何の事とも思はれず、女らしう温順おとなしう成つたと褒めるもあれば折角の面白い子を種なしにしたと誹そしるもあり、表町は俄にはかに火の消えしやう淋しく成りて正太が美音も聞く事まれに、唯夜な夜なの弓張ゆみはり提燈てうちん、あれは日がけの集めとしるく土手を行く影そぞろ寒げに、折ふし供する三五郎の声のみ何時おとけに變らず滑稽わらわては聞えぬ。

龍華寺の信如が我が宗の修業の庭に立たち出いる風説うわさをも美登利は絶えて聞かざりき、有し意地をばそのままに封じ込めて、此処こゝしばらくの怪しの現象さまに我れを我れとも思はれず、唯何事も耻かしうのみ有けるに、或る霜の朝水仙の作り花を格子門かうしもんの外よりさし入れ置きし者の有けり、誰たれの仕業と知るよし無けれど、美登利は何ゆゑとなく懐なつかしき思ひに

て違ひ棚の一輪ざしに入れて淋しく清き姿をめできるが、聞くともなしに伝へ聞くその明
けの日は信如が何がしの学林に袖の色かへぬべき当日なりしとぞ。

青空文庫情報

底本：「こぼりえ・たけくらべ」新潮文庫、新潮社

1949（昭和24）年6月30日発行

2003（平成15）年1月10日116刷改版

2008（平成20）年6月10日128刷

初出：「文学界」文学界雑誌社

1895（明治28）年1～3、8、11、12月、1896（明治29）年1月

※このファイルには、以下の青空文庫のテキストを、上記底本にそって修正し、組み入れました。

「たけくらべ」（入力：青空文庫、校正：米田進、小林繁雄）

※底本巻末の編者による語注は省略しました。

入力：酔いどれ狸

校正：岡村和彦

2014年10月13日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

たけくらべ

樋口一葉

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>